

札幌医科大学保健医療学部

F D 通信

F D 通信

第 10 号(2006. 8)

目 次

巻 頭 言	1
現代の若者と大学生	2
学生相談から見えてくる現代の学生像	4
海外先進教育実践支援プログラム：講演会参加報告	6
研修会参加報告	7
シリーズ：大学教育のヒントー 5	9
シリーズ：忘れられない授業ー 6	10

巻 頭 言

保健医療学部長 丸山知子

保健医療学部の F D 通信は、2001年に第 1 号を発行してから本号で 10 号となります。2001年の第 1 号では、F D とは何か、について取り上げています。当時、ファカルティ・ディベロップメント (F D) の必要性が言われ始めた時期であり、フロッピー・ディスクではありません等、笑い話も交えて大学教育の世界に入ってきて、多くの大学が F D の取り組みを始めた時期でした。本学部では、前学部長が積極的に早期から取り組みを始めました。思い返すとまだ 5 年しか経っていませんが、急速な勢いで変化し、現在では大学の取組まねばならない活動として位置づけられています。

本学部では、F D 活動委員会を設け、予算づけをしながら講演会や研修会を年 2 回行っております。その中心課題は教員の「教育力」を促すための活動ですが、どの程度目的が達成されているかの客観的評価はまだ明確ではありません。本学部

では、学生による授業評価に留まっている現状であり、教員による相互評価も早晚実施しなければならない課題と考えております。しかし、このように組織的活動の中で授業評価を行うことによって各教員は担当教科に関する教育展開の工夫、学生の意見に基づく改善等、以前より学生の反応を考慮した教育のあり方を考えるようになってきたと思います。同時に、学生の客観的判断能力や学習への取り組みについての課題も明らかになってきました。

今後とも教員が一致して「教育力」の向上を目指し、委員会を中心に研鑽を積んで参りたいと考えております。これまで本学部の F D 講演会にご出席下さいました諸先生、F D 通信にあたたかな励ましを下さいました諸先生方に心から感謝申し上げます、北海道の大学教育に少しでもお役に立てるよう努力して参りたいと思いますので、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

現代の若者と大学生

F D活動委員会では2006年2月28日に渡部真先生をお迎えし、講演会を開催いたしました。講演会は、日常の教育活動を反省し、大学教育とは何かを改めて考える機会となりました。この度はご多忙にもかかわらずF D通信のために講演要旨をご執筆いただき、渡部先生には厚くお礼申し上げます。

横浜国立大学教授 渡部 真

1. 現代の日本の若者

「現代の日本の若者」の特徴を、的確に捉えるにはどうすればよいのだろうか。ひとつの有力な方法は 比較の手法を用いることである。「現代の日本の若者」との比較群としては、次の3つが考えられる。

- ① 「過去」の日本の若者
- ② 現代の「外国」の若者
- ③ 現代の日本の「他の年齢層」

つまり、「現代」「日本」「若者」の3つの部分の1カ所だけを変え、比較対照するのである。

①の過去との比較検討には、さまざまな官庁統計や時系列調査の分析が用いられる。そこからは以下のような傾向を指摘できる。

1) 若者の自殺や殺人事件などは、20年前、30年前と比べると大きく減っている。他の犯罪や逸脱行動の状況が悪くなっているということも確認できない。

2) 「ひきこもり」「ニート」「フリーター」「パラサイト・シングル」「孤立化」「オタク化・マニア化志向」「勉強しなかつたり学校にあまり行かない大学生」「就職先の早期離職」「未婚化・晩婚化」などの「モラトリアム性格や行動」の強まりは確認できる。

3) 若者を見る社会の目が厳しくなった。犯罪や逸脱行動だけでなく、「モラトリアム的な性格や行動」も強く問題視するようになった。

4) 若者の時系列の意識調査の結果を検討すると、意外にも、20年前、30年前と大きく変化しない意識や行動も多く見られる。

②の外国の若者との比較では、内閣府の「世界青年比較調査」や「日本青少年研究所」の各種調査など、大規模な質問紙調査の結果が利用されることが多い。

1) 日本の青少年の意識や行動は、アジア型で

あり、中国や韓国と似ており、ヨーロッパの国々とは異なっている。アメリカは独特の回答傾向を示し、「ヨーロッパ」「アメリカ」「アジア」と回答傾向が大きく3分される。

2) 結婚や離婚などについて尋ねてみると、日本をはじめとするアジアの国々が、家庭制度維持の立場を強くとるのに対し、ヨーロッパでは個人の幸せを最優先に考えている。日本では、「結婚した方がよい」「子どもがいれば、離婚すべきでない」などと答える若者が多い。他の項目でも「個人志向」のヨーロッパに対し、「既存の社会制度」を重視するアジアの国々とまとめることができる。21世紀に入っても、日本の若者の意識は、あきらかに「アジア型」にとどまっている。

③ 他の年齢層、特に上の年齢層と比較してみると、意外にも意識や行動に差の小さな項目が多い。「親からの経済的自立は早いほうがよい」と答える若者が多いことなどは、その一例である。上の世代の若者批判は、ないものねだりであったり、小さな差異を実際以上に大きく捉えて問題視している側面も強いことがわかる。違う言い方をすると、日本の若者は、上の世代から上手に教育され、「期待される通りの日本人」につくりあげられている。上の世代が作り上げた社会や制度を改善したり、打ち壊そうという気概には欠けている。

以上①、②、③を総合して考察してみると、検討する領域により違いはあるものの、「現代の日本の若者」と、一番特徴が似ているのは「過去の日本の若者」であり、もっとも異なる特徴がでるのは、「現代の外国の若者」であることがわかる。「現代の日本の他の年齢層」はその中間に位置している。国が異なり、社会・文化が違うということは、人間形成の実相を大きく変える。私たち上

の世代だけではなく今の若者も、知らず知らずのうちに「日本人」として上手に作りあげられてしまっている。

2. 大学生の現在

現代の若者の中でも、大学生はどんな位置を占めているのであろうか。いくつか箇条書きしてみたい。

1) 2003年に私も参加した調査で、大学生1925人に彼らの自画像を聞いている(大学生文化研究会、代表・武内清上智大学教授。詳しい結果については参考文献3)の139ページ参照)。「自分の将来について、不安を感じる」が81.3%と最も多い。次いで、「初対面の人と会うと緊張する」(69.8%)、「自分が好きである」(57.5%)、「人と一緒にいるより一人の方が好きだ」(51.0%)、「何事も自分で決めないと気がすまない」(48.6%)、「人に負けない得意な分野を持っている」(47.5%)、「働かずに生活できるなら働きたくない」(46.7%)、「将来のことより現在を大切にしたい」(44.7%)となっている。自分たちの好悪や生活スタイルをのびやかに主張できる大学生の姿が目についた。

2) 同じ調査で、大学教育について聞いている。大学は「①授業や勉強を中心にすべきか、それとも、さまざまな体験をするべき場か」「②出席重視か重視しないか」「③大学では実学的知識を与えるべきか、知的刺激になればよいのか」「④学生の生活や学習について大学の先生は指導した方がよいのか、学生の自発性についてまかせた方がよいのか」を大学生に聞いている。①、②、③については、大学生の間でも意見が、ほぼ真っ二つに分かれた。

④の「先生の指導」か「学生の自発性」かだけは、「学生の自発性」が86.5%と多数をしめ、「先生の指導」は13.5%にしかならなかった。大学生としての自分たちを一人前の大人扱いしてほしいという学生の考えをはっきり見てとれる。

この調査は、実は1997年にも実施している。そのときと比べると、2003年は「学問の場」「出席を厳しく」「実学的知識」「先生の指導」がそれぞれふえている。

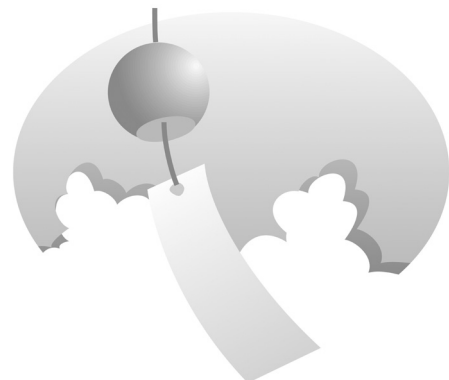
3) この上記の変化は、「大学の学校化政策」と無縁ではない。「大学の学校化政策」とは、大

学を高校や中学のような中等教育学校と同じような機能を持つ学校に変えていこうという動きで1990年代以降、目立ち始めてきた。「成績重視」「競争主義的文化」「出席必須」「管理された時間と空間」「集団主義的空間」「規則的な生活」「大学生を大人としてよりは子どもとして取り扱う」「強い統制」などが、その特徴である。「大学の学校化政策」が成功を収め、大学生のなかにも上手に内面化されつつあるのが、日本の大学の現状なのではないだろうか。ただここでは、日本の伝統的の大学が持っていた良い点が消滅しはじめてきているという問題点も見逃せない。

4) 看護大学や看護学部は「大学の学校化が、すでにかなり進行してしまった大学」「はじめから学校化されている大学」という印象を受けることが多い。看護教育を受ける大学生が抱える問題をこうした観点から考察していく必要もあるのではないだろうか。

〔参考文献〕

- 1) 渡部真著『90年代の青春』(増進会出版社、1997年)
- 2) 渡部真著『ユースカルチャーの現在』(医学書院、2002年)
- 3) 渡部真編著『モラトリアム青年肯定論』(現代のエスプリ460号、至文堂、2005年)
- 4) 渡部真・小池高史(対談)「若者のニヒリズムとニート論」(「看護教育」2006年7月号、医学書院)
- 5) 渡部真著『現代青少年の社会学』(世界思想社、2006年8月刊行予定)



学生相談から見えてくる現代の学生像

大学教育をよくしていくためには学生を知るところからはじめる必要があります。本号では学生理解の一助となるよう本学学生相談室カウンセラーの鈴木弘子氏にご執筆いただきました。

本学学生相談室カウンセラー 鈴木弘子

私はこれまで8年余りいくつかの大学の学生相談室で学生たちと接して参りました。札幌医科大学の学生相談室は今年で3年目になります。この度、FD通信に執筆する機会を与えられました。うまくお伝えできるかわかりませんが、教職員の皆様の学生理解の一助となればと思い、お引き受けしました。一人の学生相談カウンセラーの独断の混じった「独り言」として聞いていただければと思います。

大学に進学する学生の変化

ここ数年、大学生と接する方々から「最近の学生は以前と質が違う」「大学生のわりに精神的に未熟なのではないか」という声を耳にすることが多くなりました。現代の学生たちの内的な部分が脆弱になってきているのか、時代の変化に伴った社会のひずみが子どもたちの育ちに反映しているということなのか、それとも両者が密接に絡み合った結果なのか。明確な答えはわかりませんが、大学進学率が50%と言われる時代に入り入試形態が多様化し、学生一人一人のばらつきが大きくなり、以前に比べ様々なタイプの学生が存在しているように思います。近年増加傾向にあるアスペルガー症候群などの軽度発達障害の学生への対応に苦慮する、あるいは学力の低下やアクティビティアウト、ひきこもりなど心理的問題を抱える学生へのケアやサポートに追われる大学も増えています。学生相談に携わる精神科医からは「大学は学生を手取り足取り支えていかなければならない時代に入った」というお話をうかがったこともあります。

一方で、就職に関しては即戦力、すなわち高度な能力や適応力、コミュニケーションスキル、判断力、自発性などの総合力を求められ、学生たちは自分の力を最大限発揮することを求められます。それでも正社員への道は険しくフリーターにならざるをえない。そのためか今の学生は以前よりも

資格や免許を重視し、それを確実に取得できる大学や学部を選択する傾向があるように思います。もちろん本人の意向もあるでしょうが、親や教師など周囲の大人の期待や助言が影響している面もあるように感じます。けれども実際に大学に入り「自分は本当にこれを学びたかったのか」「この仕事が本当に自分に向いているのか」と悩み始める学生が見られます。偏差値や資格・免許の有無などで大学を選択するあまり、本人の意思や適性が後回しになっているように感じられる学生もいます。立ち止まり、悩んだ末に気持ちを固め前向きに取り組んでいける学生がいる反面、やっぱり自分には向いていないと軌道修正を試みる学生もいます。しかし今やめては意味がないと親のほうが一生懸命で、当の本人はモチベーションが低いまま学生を続けることもあるようです。

また、大学に入るまでは親の敷いたレールを一生懸命に走り、入学後は「今までは親や先生の言うとおりに一生懸命やればよかったけど“もう大人なんだからあとは自分で考えてやりなさい””と言われた。そんな風に言われてもどうしていいかわからない」と途方に暮れる学生もいます。夜回り先生として著名な水谷修氏は「ある時期まではすべてを親や教師がしてしまい、ある時期が来ると一気に手を離してしまう。そのときに自立できていない多くの子どもたちが混乱していくような気がする」と述べています。学生の話の聞いているとふとその言葉が思い出されます。現代は子どもたちが失敗や挫折を繰り返しながら自分の足で歩いていくという経験をしばらく時代なのではないでしょうか。

人と関わる力

相談室で学生と話していて感じるのは、自己肯定感の低さです。慶応義塾大学の河地和子教授が首都圏の大学生を対象とした意識調査の結果でも、

日本の大学生は他国の子どもたちに比べ自信力（自己肯定力、自尊感情）が低いということが判明しています。

人からどう見られるかを過剰に気にして自分を出せない、意見を言えない学生も少なくありません。そして彼(女)らから小中学生の頃いじめに遭っていた一クラス全員、あるいはグループの中で無視され、それ以来自分を出せなくなった一という話がポツリと語られます。長期反復的に続き、教師や親が気づきにくいそれらの「いじめや無視」は心の傷となり、自己評価の低さや居場所の喪失につながり、自分は人と違う、自分を出したら嫌われるという認識となり、自尊感情、対人コミュニケーションのあり方に影響を及ぼしていくように思います。彼(女)らは真面目で完璧主義なくらいに物事に一生懸命取り組みます。成績も悪くなく、むしろ与えられた役割をしっかりとこなすため周囲からは一目置かれていることが多いです。けれども心を開いて話せる友人がいない、あるいは親密な関係になることに恐れを抱き人との間に距離を置く。そうやって自分自身を保ちますが、集団で活動する時や仕事に就いた時に一番最初につまずくのはそこでの人間関係のように思います。

親から虐待を受けてきた子どもたちも、異性や同性の友人関係を築けること、親密な他者や仲間と自分を語れること、すなわち家の外に居場所を作る力を持つことで虐待体験からの回復や心理的安定が可能になっていくように思います。人は人によって傷ついても、人との関係の中で癒されていくということでしょうか。

援助職に就くということ

医療・心理・福祉・教育系などの学生は概ね他者を育てたり援助する職業（援助職）に就くことを将来の目標にしていますが、なかには無意識に自分が助けを求めている、あるいは子ども時代に辛い体験を味わったため自分が人を助ける存在になることで自分の無力感を埋めようとしているか

のような学生も見られます。人から褒められ認められ必要とされることで自分はここにいていいのだ、生きていていいのだと思えると口にする学生もいます。その是非は別として、そのような学生には自分と向き合い自分の問題や抱えている葛藤を整理する時間が必要なのではないかと感じます。

札医大の学生たち

週1回3時間（毎週火曜日16時～19時）という限られた開室時間で、しかも授業や実習などで多忙な学生が多いため、札医大の学生相談室の相談件数はさほど多くはありません（2004年4月から2006年6月までで実人数18名）。先生たちの目が学生たちへ行き届き、サポートやフォローアップがなされているためと言えるかも知れません。相談内容は大まかに分けて「気分の波が激しい、周囲への劣等感」「サークルの対人関係、人とうまく話せない」「頭がまとまらない、緊張、あがり症」「親、家族との関係」「教員との関係」「精神的に不安定、休学を考えている」「無気力、退学したい」「学業の悩み」「摂食障害」などです。利用学生の半数以上は1回のみ利用です。2、3回利用した学生もその後ぱったり来なくなったり「落ち着いてきたのであとは自分の力でやってみます」「また困ったことがあったら来ます」というメールがあり終結になることが多いです。学業やバイト等で忙しく定期的に来室する余裕がないのかも知れませんが、混乱した状況がある程度整理できれば自分の力でやっていける学生が多いのではないかと思います。

まとまりもなく、思いつくままに書いてしまいました。これからも札医大の学生たちのために何が出来るかをたえず考えながら、微力ではありますが学生の支援を行っていきたいと思っています。学生相談をご理解いただき、教員の皆様と連携していければと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

海外先進教育実践支援プログラム：講演会参加報告

講演会「多文化医療教育導入による新・医療人の育成事業」

教育プロジェクトメンバー（看護学科）堀 口 雅 美

平成17年度海外先進教育実践支援プログラムの一環として、平成18年2月10日(金)17時から19時に保健医療学部で「チーム連携能力を育成する教育とは—多文化理解の視点から—」というテーマで講演会が開催されました。講師は長野大学社会福祉学部教授の鷹野和美先生、参加者は学内教員をはじめ、医師、他施設の作業療法士の方や学生を含む38名でした。教育プロジェクトリーダーである作業療法学科青山宏教授の進行により、丸山知子保健医療学部長のご挨拶に引き続き、チーム医療を担う人材の育成ということを中心に講演が行われました。鷹野先生は長野県諏訪中央病院で本邦初のデイケア・訪問看護を開始され、また各自治体の政策アドバイザーや県立広島大学では本邦初の「チーム医療論」を開講されるなど、実践と教育の双方に卓越しておられる先生です。

まず、チームおよびチーム医療とは何かということについて社会心理学の知見を踏まえた内容がありました。かつては2人以上が集まれば「チーム」であったが、最近は2人以上が集まったことに加えて、他者に認識されることによって初めて「チーム」としてとらえられるというものでした。チームの人員数として4人なら4の力を発揮しやすいが、10人になると逆に2～3の力になってしまうこと、また集団には内集団 (in-group) と外集団 (out-group) があり、内部には肯定的でも外部にはステレオタイプ化して否定的になること、人が人である以上、たとえ心理的凝集性が低くても必ず外集団が存在するということが話されました。外集団においては目標を一つにし、協働することで内集団になることは可能だが、ただし看護と介護のように類似した職種では協働しても内集団化は困難であるとのことでした。

保健医療福祉の実践活動の場面を考えてみると、患者や家族の方からチームとして認識されているのか、それとも同じ職種の集まりとしての認識されているのかによって、ニーズの現れ方にも違い

が生じてくるのではないかと思います。チームの人員数を4人に制限することや内集団と外集団の特徴をなくすことは現実には不可能ですが、特徴そのものを知っておくことはさまざまな困難に直面したときにその現実を別の観点からとらえ直す手がかりを与えてくれるのではないかと思います。

鷹野先生はまた、制度化された専門技能の階層性はあるものの疾病構造が変わってきている現代では、専門家は医師や看護師に限定されるのではなく、他の職種も専門家であるとのこと意見を述べられました。また上位者は下位者を無視して保身すること、下位者は上位者に攻撃的になることの特徴があり、その解決にはディスカッションの機会を持ち、上位者はある程度、権限や裁量権を下位者に持たせることが重要であると話されました。

さらにアメリカのホスピスで、医師、看護師、牧師などさまざまな職種がリーダーとなっていることを知り、常に誰か1人がリーダーとして固定するのではなく、その時点のニーズを充足するのにもっともふさわしい職種、もしくは人がリーダーとなること、そしてリーダーは交代するものであることを強調されていました。またデンマークでは地域ケアチームとしてヘルパー、看護師、医師、薬剤師等が連携し、例えばヘルパーが健康問題を発見した場合、数時間のうちに対応がなされていること、これはどの職種においても共通の用語が理解されているから可能であることを話されました。

教育に関して、鷹野先生が県立広島大学で授業をされた「チーム医療論」(1年次)、「チーム医療演習」(4年次)のお話がありました。1年次ではチームであることの意義と特性を知ることを中心とした講義を、4年次では模擬患者を用いた学内演習やディレンマ事例の検討会を行い、何を根拠に実施しているのかを理解するにはその職種の教育課程を知ること、多学科合同演習の実施、

そして他者に伝える訓練を意識して行うことの重要性が話されました。2年次までは一緒に解剖・生理学を学習した学生が4年生になると、例えば「移乗」という用語の理解が各専門によって異なってきた状況があるとのことでした。卒業前にそれぞれの職種ができることとできないことの境界を相互に開示し理解することの意義を述べておられました。

共通の基盤を持って学習がスタートし、その後各専門の学習が進むことで学生はそれぞれの分野の独自性を学んでいくこととなりますが、自らの独自性を理解するためにはそれぞれの分野において共通する点と相異なる点は何であるのかをわかるプロセスが重要なのではないかと思います。

「理想的チーム医療はいい意味での相互干渉がなされていることである」と鷹野先生はお話しされておりましたが、互いの独自性を尊重しつつ、かつ目標に向かって協働できる能力の基盤を育成することが基礎教育で求められるのではないかと思います。

最後に北海道発の地域ケアチームを全国に向けて展開してほしいとの願いも託され、またフロアからの質問も活発にありました。今回ご紹介したほかにも、デイケア・訪問看護開設時のことやスウェーデンやベラルーシの状況など具体性の中に多くの示唆を含んだ講演会でありました。是非、今後の教育・研究活動に反映させていきたいと思えます。

研修会参加報告

第12回大学教育フォーラムに参加して(京都大学講等教育研究開発推進センター主催)

F D活動委員(作業療法学科) 坪田 貞子

京都大学高等教育研究開発推進センター主催による第12回大学教育フォーラムが2006年3月27、28日の2日間にわたって京都大学で開催されました。第1日目は個人研究発表と小講演、特別講演、シンポジウム、2日目も同様に個人発表とラウンドテーブル企画としてテーマ毎の討論が行われ、どのセッションも発表後の質疑応答では時間が足りないほどの熱い討論が続きました。今回、参加できたいくつかの発表や講演についてご報告致します。

個人研究発表「授業評価の年次変化と授業タイプによる違いの影響」と題して、愛媛県立医療技術大学の澤田忠幸氏から報告がありました。2000年から4年間にわたる授業評価の結果をもとに、項目による結果の安定性や教育改善の反映されやすさについて、授業評価を構成する要素として教員の「授業技術や授業準備」、「学生のコミュニケーション」、「授業を通じた学生の習得感」、「授業についての総合評価」の4つの要因を仮定し、授業と演習といった授業形態の違いが4つの要因間の

連携に与える影響の違いについて検討してまいりました。この結果、「シラバス」、「興味・関心」、「ポイント強調」、「知識・技術」、「受講価値」、「総合評価」の6項目について年次が上がるほど改善が認められ、「授業準備」、「話し方」および「対応満足」が有意に改善したと報告してまいりました。また、授業形態では講義型と演習型では上記6項目で違いがみられ、講義型では「シラバス」、「興味・関心」演習型では、「ポイント強調」、「知識・技術」の項目に違いが認められた。また、講義型の「教授技術」から総合評価のパスに関連はなかったのですが、演習型では、「教授技術」、「学生の習得感」、「コミュニケーション」から総合評価のパスには明らかな関連性があり、講義型と演習型では「授業にたいする学生の満足感」に影響する要因に違いがあったと報告してまいりました。報告者の大学は私たちの学部と同じような公立の医療系大学であり、授業評価の際の要因分析には参考になるものとおもわれました。

兵庫県立大学大学院工学研究科の小久保吉祐氏

により「記名式と無記名式授業評価アンケートの比較」の報告がありました。授業評価を行う際、記名と無記名がありますがこの報告はその比較を行った報告です。その結果、無記名で行ったより、記名評価の方が全体には得点が高くなる傾向があり、特に、自己評価得点が高くなることが分かったと述べています。しかし、因子分析を試みた結果、無記名の場合は固有値が1以上の因子が1つになり、分析ができなかったとしています。つまり、記名式は無記名に比べて評価が高くなる傾向にあり、特に学生の自己評価に関して信憑性が低いため、無記名、記名どちらの場合のアンケートでも、特に少ない数の因子で結果が左右されることが分かったと結論づけていました。

また、十文字学園女子大社会情報学部の星野敦子氏の「授業改善を促す評価要因の類型化」と題する発表がありました。これは、マーケティングリサーチの分野で利用されているコンジョイント分析を用いて授業評価を行った報告で、学生の授業評価アンケートデータとコンジョイント分析から得られた各要因の部分効用値の推定並びに相対重要度の3つの変数をバブルグラフで3次元に表し、要因の類型化を行うことで授業評価を授業改善に連携させる方法を提案したものです。この結果、「学生の理解度を考慮した授業」や「学生の反応や理解度を生かした授業」をするよう授業改善を行う必要があることが分かったとしています。このように授業評価データとコンジョイント分析

を連携する事で授業要因の類型化が可能となり、授業改善に向けた具体的な示唆が得られるとしていました。

最後に特別講演では「日本の高等教育の課題」と題して、井村裕夫元京都大学総長の講演がありました。日本の大学教育の歴史を振り返りながら、第2次世界大戦後の教育制度は単線型となり、教育内容のマニュアル化が進み、工業社会に相応しい均一な人材育成には適していたが、今日のような知識社会では独創性があり新しい知の創造に関わる人材が何より必要であるとした上で、教養教育の重要性を再認識すべきとしています。現在の大学教育で、何より必要なことは「創造性を持った人の個性を圧迫しないことである」とした上で、学問分野が激しく変動し、融合し、新しいパラダイムが生み出されようとしている今だからこそ、幅広い知識を持ち批判的施思考が出来る人材が求められると述べていました。このことを基盤に、専門教育のあり方について、大学院は研究機関ではなく、研究者あるいは専門職を育成する機関であることを認識して、各大学の特色を生かした大学・大学院教育のあり方を再構築することが大学の課題であろうと強調していました。

以上、2日間のフォーラムにおいて参加できた興味深かったセッション、講演について報告いたしました。大学の中でFD活動を推進していくことの重要性と困難性を強く感じた2日間でした。



シリーズ：大学教育のヒント－5

困った学生たちの対処法①

F D活動委員（一般教育科） 高橋 義 信

「教育とは？」という質問の答えで私が気に入っているものに、「ひとりの教師が大勢の学生相手に彼らがしたくもないことをさせること」というものがある。教育の困難性がよく示されている。大多数の学生はよりよい人生を実現するための手段として大学を卒業したり、資格を取ることに興味があるが、もともと学問的興味があるわけでもないし、大学の授業に出たいわけでもない。教育は多くの人にとっては必要悪以外の何者でもない。そんな大勢の学生にひとりで立ち向かっていかななくてはならないのが教師なのである。静かに学問や研究に専念したいがために大学の教師という職業を選んだのなら、その選択は間違いといえるであろう。

しかも、大学進学率が上昇してくると、一部の有名大学以外では明らかに大学教育に学力・社会性の点で不適なままが入学することになり、大学は「困った学生たち」を数多く抱え込み、彼らを教師に押し付けてくるのである。

医師が患者を選べないように、教師も学生を選ぶことはできない。「困った学生たち」とどうかわかっていくか、あらかじめ方針を立てておくべきである。

「困った学生たち」の代表は「うるさい学生」である。授業中に携帯電話が鳴ったり、教室の後方で数人で仲良くおしゃべりをしたり……。日本の大学ではおなじみの光景である。よくある教師の対応に、聞こえない、見えないふりをする、つまり何もしないというのがある。それによって学生との無用な衝突を避けることができるし、学生の自主性を尊重しているのだと自分を納得させることもできるかもしれない。何もしないことでうまくいくこともあるが、学生が教師の「弱さ」を感じ、凶に乗って収拾がつかなくなる可能性も大きい。教育とは「ひとりの教師が大勢の学生相手に彼らがしたくもないことをさせること」であるならば、うるさい学生に何もできない「弱虫」と

学生たちから思われることは教師にとって致命的なことである。

まず、第一回目の授業で、何が許されないのかを説明するほうがよいだろう。携帯電話の電源を切る、飲食はしない、おしゃべりはしない、歩き回らない等々。特に重要と思われるものは、シラバスに明記したほうがよいだろう。困った学生の困った行動の原因に「無知」がある。悪意があるというよりは、こういうことはいけないのだということが単に分からないゆえにそうしているということがしばしばあるのだ。少しぐらいワールドカップの話をしたっていいじゃないですか、歩き回って何がいけないのですか……。この種の無知と厚かましさは現代学生の特徴のひとつかもしれない。この種の規則を定めるときは、教師の権威を威圧的に振りかざすのではなく、よりよい授業を実現するために協力を求めるといった姿勢のほうが、学生の納得が得られやすいだろう。

しかし、規則を定めればそれでうまくいくというわけではない。それでもうるさい学生には、いきなり強硬な手段に出るのではなく段階的な警告という方法が好ましいだろう。まず、うるさい学生と視線を合わせるようにする。たいていはそれでおとなしくなるのだが、効果がないときは、その学生のほうに歩いていく。話し続けるようであれば隣に立つ。それでも効果がなければ、人差し指を唇に当てて「しっ」と言ったり、「もう授業は始まっているよ」と穏やかに言えばよいだろう。また、席変えも可能なら効果的である。段階的な警告という方法が取れるのは、ゆったりとした教室での比較的少人数の授業に対してであり、狭い教室に大勢の学生がすし詰め状態という教育環境ではなかなか実行できない。しかし、うるさいのは後者なわけで、少人数教育ができればうるさい学生などは激減するのである。

目に余るような学生は、授業終了後に率直に話し合うべきである。これも叱りとばすというより

は、冷静に学生の問題行動を指摘し、授業が円滑に行われるよう協力を求めるという姿勢と保つほうが良いだろう。同時に、授業中での秩序維持に対し強固な意志を持っていることを分からせなくてはならない。

問題のある学生を叱るのではなく協力を求めるべきだと繰り返してきたが、それにはいくつかの理由がある。ひとつは現代の教師—学生関係が上下関係というより、対等な関係と捉えられるようになってきているからだ。教師が高みから滔々と説教をするというのは、時代遅れの教師による時代錯誤的な振る舞いと学生に受け取られがちとなる。

叱るのではなく協力を求めるべきもうひとつの理由は、現代の学生が叱られることに慣れておらず、感情的に反応しがちだからである。つまり叱っても、あまり効果がなく、教師に対する敵意のみが増大するという結果に終わりがちなのである。このことは、授業評価の自由記述欄に、教師の発言や行為に傷つき、逆恨みとも言えるようなことを書いてくる学生が少なからずいることから伺える。些細なことで傷つき、それをなかなか克服できないといった自我の弱さも現代学生との特徴かもしれない。

また、教師の中には、問題学生に対して「単位をやらない」など脅迫めいたことを口走ってしまう人がいる。このような行為は教師という優越的地位の乱用と非難されても仕方がないだろう。成績評価の方法はシラバスの中に明記されており、教師といえども勝手に変えるわけには行かない。教育の目的は結局のところ学生の知的・人格的発達に貢献することであるわけで、そのため学生に対する有害行為禁止の原則（the principle of nonmaleficence）は教育の倫理の最初に来るものである。脅したり、酷評したり、意図的に傷つける発言をしたりすることは、たとえ問題学生に対してだとしても、避けるべきである。

うるさい学生がいると、教師は学生が悪いのだと判断しがちであるが、必ずしもそうとは言えないことに留意すべきである。うるさい学生が他の授業でもうるさいとは限らないのである。教育内容が難しすぎないか、あるいは簡単すぎないかをもう一度検討すべきである。教育方法も適切に見直すべきである。教師が一方的に話をするといった講義形式は、うるさくなりやすい。途中で、質問をしたり、課題を与えたりすることは、学生を静かにさせる効果的な方法である。

シリーズ：忘れられない授業－6

看護学科 横溝輝美

「忘れられない授業」というテーマを頂いてから、私は小学校から大学院までさまざまな授業を思い返してみました。ここでは私が生まれて初めて「授業」というものを受けた小学校1年生から2年生にかけての思い出を紹介させて頂きたいと思います。授業についての思い出なのか、先生についての思い出なのか、明確に区別することはできないのですが、当時の担任の先生であった佐藤先生（仮名）の授業についてご紹介します。

二十数年前、私は北海道の中央付近に位置する小さな炭鉱町の小学校に入学しました。そこで初めての担任が佐藤先生でした。佐藤先生は、当時40歳代後半の男性で、背格好は中肉中背、物腰

は穏やかなベテラン先生でした。しかし、とても親しみやすい先生であったことは間違いありませんが、小学1年生の児童にはややインパクトが薄かったかもしれません。残念ながら私には、入学当初の佐藤先生の印象がほとんど残っていないのです。その佐藤先生を印象付ける出来事は、入学して数ヶ月後に起きました。

ある日、佐藤先生が漢字の書き取りのテストを実施すると言いました。すでに国語の授業も始まっており、それは自然の流れだったと思います。もちろん抜き打ちテストではなく、テスト範囲が示され、1週間くらい勉強をする期間もありました。私は自宅で一生懸命漢字の書き取りをしたこ

とを覚えています。そして、テストの日がきました。テスト内容は先生の予告通りでした。私は勉強の甲斐があり満点を取ることができ、多くのクラスメートも良い点数を取りました。しかし、それだけで終わっていたのならば、これほど記憶には残っていないでしょう。そこで佐藤先生は、「クラス30人全員が100点を取るまで同じテストをする」と宣言したのです。

「全員100点」の目標が掲げられてから、クラスメートは各々に必死で勉強をし始めました。私も自宅に帰ってからも何度も練習しました。そして迎えた2回目のテストで、私を含めて多くのクラスメートが100点を取りました。しかし、全員が100点にはなりません。クラスに重い空気が流れました。その時私は、佐藤先生が本当にもう一度同じテストを実施するのか半信半疑でした。しかし、佐藤先生は当たり前のように「よし、また明日頑張ろう!」と言ったのです。この一言でクラスにたちこめていた暗雲がパッと晴れて、一気に盛り上がりを見せた。私を含めて多くのクラスメートが「今度は楽勝!」と思ったに違いありません。しかし、現実はその簡単ではありませんでした。

佐藤先生は予告どおり、全く同じテストを実施しました。みんな、「今度こそ!」と意気込んでテストに臨みました。しかし結果は、数名のクラスメートが100点を逃してしまったのです。その時佐藤先生は、また何事もなかったように「残念だったね、また明日頑張ればいいよ!」と言ったのです。しかし、次のテストも、そのまた次のテストも全員100点は達成されませんでした。この頃になると、100点を逃すクラスメートの顔ぶれは決まってきました。私を含めた多くクラスメートが「なんで出来ないのさ!」と心で思ったり、実際にそのクラスメートにそんな言葉をぶつけてしまったかもしれません。しかし、次のテストもまた駄目でした。

その間、佐藤先生は100点を逃したクラスメートを特別にかばうことはしませんでした。何事もなかったかのように「また、がんばろう!」とクラス全体を励ますだけでした。現代ならば、そのことがきっかけで、「いじめ」にでも発展しそうな出来事です。しかし、その時のクラスは違いま

した。いつのまにかクラス全体に「100点を取れない子に頑張ってもらおう!」という機運が高まり、放課後に自主的に学習会が始まったのです。私もその学習会に加わり、100点を逃したクラスメートに対して必死で教えていました。

そうして迎えた次のテストで、ついに全員が100点をとることができたのです。その時のクラスの盛り上がりようは、凄まじいものがありました。学校中に歓声が響き渡ったのではないのでしょうか。そんな私たちを、佐藤先生は静かに嬉しそうに見つめていました。

佐藤先生の「全員100点」の課題は、机上での勉強に限りませんでした。次に佐藤先生は「体育で跳び箱を全員クリア」という課題を出したのです。これは、体育が苦手だった私にとっては苦しい課題でした。漢字の書き取りのように何度も挑戦した結果、私はクラスで5~6人残った飛べない組に入ってしまったのです。私はその時に、非常に悔しくて、恥ずかしい思いをしたのを覚えています。しかしその時、助けてくれたのは、漢字の書き取りで何度も100点を逃していたクラスメートでした。そのクラスメートは運動神経が抜群で、跳び箱を軽々と飛び越えることができたのです。この時、漢字の書き取りの時と同様に放課後に体育館で跳び箱の特訓が始まりました。みんなで様々な工夫をして、どうすれば飛べるのか考え、手本を見せ、アドバイスをしてくれました。そして数日間の特訓の甲斐あって、私はついに跳び箱を飛ぶことができるようになったのです。そして他の飛べなかったクラスメートも無事に成功し、全員が跳び箱をクリアしたのです。

このとき、私は、できない悔しさとみんなが支えてくれる嬉しさを感じました。また、漢字ができなかったクラスメートが、体育では堂々と跳び箱を飛ぶ姿をみて、その子の違う側面を見る機会にもなりました。そのことで、多方面から人を見ることの大切さに気がついたように思います。

その後、クラスの団結は強まり、いろいろな意味で助け合う関係となり、楽しい2年間を過ごしました。佐藤先生は、私たちに協力しあうことの大切さと、人それぞれに得意・不得意がありつつもすばらしい個性があることを学ばせたかったのかもしれない。これらの経緯の中で、佐藤先生

が私たちに積極的に指示をすることはありませんでした。ですから私たちは「自分たちの力でできた」という実感を強く持ちました。しかし、一つ間違えればいじめに発展したり、事故につながったりする可能性もある場面において、陰からサポートしてくださったのが佐藤先生だったのではないかと思います。

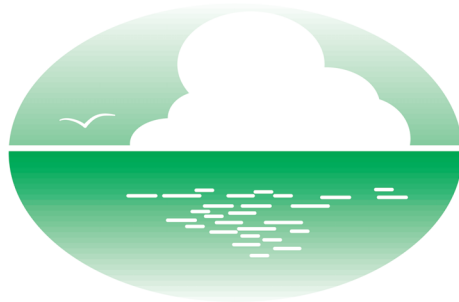
また、佐藤先生は、クラス全員の親と毎日連絡ノートを交換していました。2年間で最終的にどのくらいの親が継続したのかは分かりませんが、私の親は2年間ほぼ毎日、連絡ノートを交換していました。今になって考えると、大変なことであったと思います。このような陰の努力で佐藤先生はクラス一人ひとりの個性を把握し、それらを伸ばすことができたのだと思います。

ところで、あれから20数年が経過しましたが、連絡ノートは、いまだに実家に保管されています。しかし、私は一度も見たことがありません。なんとなく気恥ずかしくて、進んで見る気持ちにならなかったのです。しかし、自分が教員となった今、

佐藤先生の一人一人を大切にし、自由に個性を伸ばす教育とはどんなものであったのかを振り返るためにも近々読んでみようと思います。

最後に佐藤先生の素敵なエピソードをひとつご紹介します。

私は、佐藤先生が担任になって以来、毎年、年賀状を交換しています。しかし、今年のお正月に限って喪中のため年賀状を欠礼していたのです。すると正月早々、差出人不明の携帯メールが届きました。内容は「年賀状がないので、心配しています。」とのこと。悪意のあるメールには思いませんでしたので、私は「喪中のため欠礼していました。すみません。ところで、どちら様ですか？」と返信しました。すると、「佐藤です。覚えてのメールなもので名前を入れ忘れしました。元気そうで安心しました。」との返事です。現在70歳代半ばとなった佐藤先生のすばらしさは、今でも健在であることを実感し、微笑ましかったお正月の出来事でした。



F D通信へのご感想、ご意見をお待ちしています。

E-mail : fdhs@sapmed.ac.jp

発行日：平成18年8月1日

編集・発行：札幌医科大学保健医療学部 F D 活動委員会

委員長：稲葉佳江

委員：坪田貞子、小塚直樹、高橋義信、大日向輝美、坂上真理